
魔王様の食卓

夢氷漣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王様の食卓

【Nコード】

N3488X

【作者名】

夢氷漣

【あらすじ】

産まれながらの魔王、支配者、レイル・フルカは完全な悪である。更新は悪役が書きたくなった時だけという悪役しか目立たない連載。作者の魔王、魔族像が浮き彫りになっている為、グロ注意。

魔王様は三度の飯が好き

「ねえねえムミア将校、トルテウラ拷問官を見なかったかい？」

可愛らしい少年が猫の形をした飴を舐めながら、ムミアと呼ばれた者を見る。

ムミアは全身を包帯で厚く巻いた、見た感じは性別不明の焼死体といった風体である。

そのムミアは少年を見て、敬礼をして話す。

「私の予想ですみませんが、あの刃物狂いでしたら今頃喜々として肉を切っているかと。」

ムミアは噎れた若い男の声でそう言い切ると、続いて「刃物と魔王様にしか興味を示さない奴ですから御用が御座いましたら魔王様がお呼びになりましたらすっ飛んで来ますかと。」と一息で言った。その表情は（見えないけど）どこことなく満足そうだった。

それを聞いた少年は、「それもそうだねえ」と嬉しそうに無邪気に笑った。

「もしかして…“今代の勇者”の件ですか？」

「うん、そうだよ。…これからが忙しくなる…」

ガリリと飴を噛み砕いた少年は、にいいつと歪で悪意の詰まった邪悪極まりない笑みで嗤った。

「それに愉しくなるよお」

——魔王レイル・フルカ。
彼は少年の姿をした、悪の権化である。

魔王様は三度の飯が好き（後書き）

とりあえず、私の頭の中にある魔王像をそのまま忠実に書いた感じ
です。

似たキャラは探せばいっぱい居そうですね。

とりあえず殺伐とほのぼの…いや、ほのぼのはない…か…？

他の作品と違い、魔王のあくどさに遠慮する気がありません。

まあ…たまにこんな悪役なネタしか浮かばない時があったりします。

何故か正義側とか恋愛話とかよりグロいのかあくどい方が書くの
が楽しい進むという私はきつと終わってますね。

魔王様と部下と勇者

荘厳な城の内部、苦しげに呻く人の声が響く。

剣を携えた金髪の青年に、折られた杖を支えとして立つ女性、騎士その物の面構えをした男性に、細腰のシスター服を着た女性。計4名の声が城の中に放たれ飽和していった。

「勇者よ…お前は弱いな。希望と呼ばれた者の癖に、なんとも貧弱なのだなあ……………はは可哀想に。」

人ならば胸部に当たる部分に付いた一つの目玉をギョロギョロと動かし、黒い人型が優雅にマントを払った。

その四肢には傷すらも無く、勇者と呼ばれた青年と違い余裕綽々といった表情である。

だが、悔しそうにギリギリと歯を食いしるシスター達3人とは違い、当の本人である勇者は負の表情を浮かべてはいなかった。

まだ、策があるという表情だ。

「勇者を…人間を…希望をなめて貰っては困るね。見ろ！！これが俺達の希望の光だ！！」

光を増す剣を掲げ、誇らしげに勇者は笑った。

それは女神から授かった聖剣エクスカリバーである。

しゅんしゅんと光輝く剣を以て、狼狽える魔王を八つ裂きにした。すると、魔王は塵も残さず剣に吸い取られ消え失せる。

「やった…！！やっと倒した…！！！」

喜ぶ勇者に祝福をするお供達。

感極まって涙を流す男性が、「王へ…王へ報告をしよう…！」と勇者へ提案した。

「ああ、そうだな…！！」

——その夜。

「あんまり役に立たなくてごめんなさい…」

そういう可愛らしい恋人が呟き、勇者は破顔した。

「良いんだよトルテ。それよりも、君に怪我がなくて良かった…」

抱き寄せる勇者に寄り添うトルテ。

彼女は嬉しげに微笑んで、瞳を閉じた。

月が赤く輝く夜だった。

——次の日。

勇者一行は早急に城へ向かった。

早くこのめでたい話を直接王へと報告し、愛しい女性と予てより決めていた結婚式を開く為に。

前もって敵を倒した事を報告した為か。

街中パレードで賑わっていた。

帰還した勇者を裸眼で見る為に大量の人々がひしめき合って、今か今かと門を眺めているのが分かった。

勇者は女神の力を授かった為に他人と逸脱した力を持っているので、それが分かったようだ。

倒した。

それが紛れもない事実なんだと、勇者の胸を熱くさせた。

ゆっくりと近づくに連れて、街の人も勇者一行に気付いたようだ。大小様々な歓声が上がった。

開門し、勇者一行が入った時は凄い騒ぎだった。

子供達は勇者一行の歩く道の横に総出で花を持ち、歩くに連れて花を：豊かな色合いの花びらを撒いていく。

美しい光景にか、ほうっとトルテが溜め息を吐いた。

その美しい花びらの道は城へと続き、辿り着いた城にはメイドと貴族に騎士——城の面々が喜びを隠せぬ表情で勇者を迎えた。

謁見の間には仲良くなった騎士団長も立っていて、勇者の背を叩いて「お帰り」と笑った。

「ただいま。」

笑みと照れを抑えれぬままそう零すと、騎士団長は恰幅の良い体を揺らしてガハハと笑った。

「おいおい、随分と良さげな顔してるじゃねえか！！もしかしてアレか？コレか？やっとトルテ嬢とやったのか？」

「こらあ！！聖職者の前でぞ、そんな事を！！破廉恥ですっ！！！！」

「！」

シスターがムツと怒ると、騎士団長は悪げもなく「悪いな」と謝った。

それをシスターがジト目で見ると、騎士団長は「ロコは堅すぎる」と苦笑した。

「五月蠅いわよミア!!」

「ミアつつーな!!」

シスターロコと騎士団長ミアがそのまま乱闘になるその前に、騎士の風格をした男性が呟いた。

「王。」

一言だがその一言に呆れの感情が籠もっている事に、勇者達は気付いた。

長く一緒に過ごしていたお陰で、彼の感情が分かるようになったのだ。

「ごめんなさい…ルイ。」

「ああ…悪かったな邪魔して…」

ロコとミアの二人が謝った事で、ルイと呼ばれた男性は頷いた。

「仲。」

仲が良いなという微笑ましそうな感情が籠もっている事に気付き、

また問答が起こる前に無理やり二人を引き離した。
そして——王の間へ。

旅を始めて三年もの長い期間、勇者は何度も何度も自分には無理だと此処へ来て言おうとした事か。

何せ魔王は拠点をしよっちゅう変えていき、街を滅ぼすのはランダムな上に集中的にしていた。

上部から末端まで行き届いた、かなり組織的な動きをしていたのだ。そこには勇者は感服した。

…敵は策略家で、魔力も何もかもが強大だった。

様々な過去を、始まりを、未来を思いながら、勇者は口を開いた。

「——王。私は悪の権化、残虐非道な魔王を我が手で倒して参りました。」

「……………」

髭の立派な巨漢の王は目を閉じ、勇者の報告に小さく微笑んだ。

「最後には女神の剣で消えていってしまいました。」

「……………」

目を閉じた王に報告するも、閉じたまま微笑むだけ。
話をまだ聞きたいようだと言者は苦笑した。

「…王、レカ口王。魔族と私達は共存出来ない生き物同士でしたが…少し、虚しい気持ちです。」

そう零した後に、レカロは目を開けた。
そして——立ち上がる。

「…王？」

急に立ち上がった王に怪訝に思っても、嬉しげな表情を見て感極まったのだと勇者も微笑んだ。
そして…腹が赤く染まった。

「え？」

理解出来ずに呆けた顔をした勇者が腹を見ると、見覚えのある折れた杖があつた。
貫通、していた。
それを自然と視線で伝った先には、折れた杖を握るシスター…ロコが居た。

「……あつ…え？な？？そ…え？」

激痛で視界が赤く染まる。
だが、それ以上に混乱に陥る。
ずぼりと折れた杖が抜けると、赤く染まったその杖を持ったロコがにたりと嗤った。

「… προσευχη… ορκι… ζομαι… θεραπευ
ω…」

トルテがそう呟くと、腹の傷が塞がる。
混乱している勇者を抱き寄せ、ロコを睨むトルテ。

勇者は、ロコが魔族に操られているのだと思い見やった。

…笑っていた。

ゲラゲラと笑うロコ。

そこで訝しかげに思いまさかと思ひ悔しげに思う。

ロコはいつの間に入れ替わった敵だと。

「ぴんぽーん！！おおね勇者くんの正解なーのよー！！じー
つーはーロコさんは敵なーのよー！！！」

ぴょんぴょん。

愉しげに可愛らしく跳ねるロコ。

奇しくも聖職者に化けていた魔族は、ぴょんぴょん飛び跳ねて回った。

びちゃびちゃと勇者の血が飛び散るもお構いなしだ。

勇者の靴にも血が飛び跳ねているのに、何故かロコのシスター服には付いていなかった。

「…違う…お前の名前はロコじゃない！！ロコの名前を侮辱するな
…！」

勇者が憤りそう怒ると、ルイが豪快に笑った。

えと思う隙もなく勇者は飛び跳ねる。

「ロコはロコ、某は某だぞ。」

飛び跳ねた勇者はまた、トルテの癒しの魔法に包まれて治る。勇者は絶望の眼差しでルイを見やり、そして…トルテを見る。心配そうな表情で此方を見ていた。

「どるで…にげ…」

癒されようが溢れている吐血まで消える訳でもなく、痛みが全て消える訳でもない。

それでも堪えた言葉を聞いて、トルテが呟いた。

「貴方、オツム大丈夫ですか？」

勇者のその言葉を飲み込むよりも先に、レカロ王が心底嬉しそうに呟いた。

「んー…満腹満腹♪やっぱりご飯は養殖より天然だよねえ？」

「……………え…？」

髭面の大男に似合わない、可愛らしい少年の声。

勇者は間抜けに口を開け、仲間を見た。

にやにや笑う騎士団長ミアに愉しげなシスターロコに嗤い過ぎて悶絶するルイ。

そして側にいる騎士達もくすくすと嗤い、何よりも…

恋人の筈のトルテが様子の可笑しい王に寄り添った。

「ねえ魔王様、アレ…心底気持ち悪いんですけど。」

指差してそう呟いたトルテ。

勇者は、そのトルテに魔王と呼ばれたレカロ王を見る。

…そして、憎々しげに睨みつけた。

「王を殺して…殺して…成り代わって嘲笑っていたのか魔王!!!」

睨む勇者を見つめ、魔王はうつとりと笑った。

「君のその感情は心地よいねえ…それだけで甘くて、お腹いっぱいになれそうだよ。」

ずるり。

何かがズレる音がしたと思えば、王は小さな少年の姿に変わっていた。

ずるり。

何かと思えば、勇者の腕は潰れていた。
そして激痛に目に痛い光景。

「う…うあああああああああ!!!!!!」

潰れて抉れ見える場所からは不自然に溶けた骨が見え、神経や血管やらが糸の様にピンク色の肉から飛び出していた。

気付けば、その取れた腕をトルテが玩具のように振り回しているのが見えていた。

絶叫を上げながらトルテを見ていると、小さく笑んで高らかに言った。

更なる絶望の言葉を。

「ワタシは魔王様直属の部下トルテウラ！……誇り高き拷問官です……」

挨拶代わりに勇者の腕の取れた部分に指を突っ込み中の骨を撫でた。それだけで壮絶な痛みと絶望が襲うというのに、最悪な事に気絶する事が出来なかった。

次に、ミアが優雅にお辞儀をした。

「勇者殿、私はムミア将校で御座います。ムがないだけで随分と印象が違いますな……魔王様。」

ミア改めムミアのにやにや笑いは見えなくなったが、包帯で体までマトモに見えなくなった。だが恐らく、笑っている。

勇者は霞む意識で女神に縋った。

「んーそうだね、名前は大事だしねー」

肯定している割にはどうでも良さそうにそう呟くと、ロコを見て「君も一応名乗ったらどう？」と飴を取り出して舐めながら言った。

「ロコさんはー意識を操る魔王様直属の魔法使いっ子なーのねー♪ちなみにちなみに性別はなーいのねー？」

「……らしいよ？」

くるくる回りながらトンツと勇者の胴体に着陸し、直ぐ様離れた。

胃の中の物を吐き出し咽せる勇者を見下して「きゃー魔王様ー。こいつばっちーのねー。」と杖で頭を潰した。

すると、トルテウラがロコを睨んだ。

「これからのになんて事をー!」

「ごめんごめん、直すのよー」

くいつと指を上げれば、虹色の光が現れた。

それを「女神の祝福ーなーのよー」と放り投げる。

すると、勇者はいとも容易く生き返った。

「は…は…女神…様…力を…」

意識が戻ると同時に聖剣を魔王に向ける勇者。

それを見て、魔王はまるで見た目同様に子供の様に小首を傾げた。

「その剣、本当に聖剣なのかな？」

最後になっこりと笑った魔王の言葉通り、聖剣は聖と呼べるか怪しい色を放っていた。

それはさっきまで、金色に輝いていたというのに。

「なんで…赤く…」

呆然と呟く勇者に向かって、ロコが元気良く手を上げた。

「ロコたんのー魔法がー切れたからなーのねー」

「…え？」

心底分らないという顔をした勇者を見て、ムミアが小馬鹿にしたように返す。

「貴方は本当に分からないのですか？分からないんですね？困った人だなあ。ならばお教えしましょう！それは」

「ロコたんが女神のふりしてー人間の王のふりした魔王様にー授けたー」なーのよー」

「ちよつと貴方、私の台詞を取らないで下さいよ！？」

言う間にも剣はどす黒く染まり、それは最早聖剣と云うよりも魔剣と呼ぶべき代物へと変わりつつあった。

今まで頭が上手く回らなかった勇者だが、流石にその意味は分かっていた。

「…つまり。初めから、この旅に、三年間の旅に、仲間との会話に、…いみ…意味は…なかった…？」

その意味を理解をし、してしまい、愕然とした。

つまり、魔王に魔王を倒せと命じられ、魔王の部下と共に用意した偽物の魔王を殺させた。

それも…女神という人類の希望の筈のものまで語って。

「なんで其処まで…！？なんで其処まで非道になれるんだよお前等！！人間が！！人間が何をしたというんだ！！！！こんな悪い事ば

かりして！！！！」

「悪い事？」

勇者の言葉を聞き、魔王はきよとした。
そして、言い放つ。

「もしかして人ってさー、ご飯とまで仲良しゴツコしてるの？それ
って可笑しい事だよ？だって餌だよ？なんで仲良くするの？訳分か
んない。それに、ぼく、うれしいもの。」

理由はそれで十分だよ。」

魔王レイル・フルカは可愛い顔に悪意をいっぱい込めて、獰猛
に笑った。

その表情は邪悪な支配者の笑みそのものだった。

魔王様と部下と勇者（後書き）

魔王レイル・フルカ

レイル…スペイン語で笑う

フルカ…ラテン語で絞首台

“笑う絞首台”

種族…ある種の突然変異である為、恐らく新しい種族。付けるなら魔王種？

特徴…負の感情を食する。見た目は子供、言動も子供、あくどさだけは大人並み。

ムミア・ローシ将校

ムミア…ラテン語でミイラ

ローシ…ロシア語で嘘つき

“嘘つきミイラ”

種族…名前通り、と言いたい所だけど、種族はある種族だが呪われている為に違う種族になっているかもしれない。が、詳細は不明。特徴…ぐるぐる巻きの包帯から偶にたまぁーに覗く顔はイケメン（魔族のメイド談）魔族の美が種族により違うので、人間から見えてイケメンかは謎。

トルテウラ・カネレ拷問官

トルテウラ…スペイン語で拷問

カネレ…ラテン語で歌う

“歌う拷問官”

種族…ドラゴンと天使が混じった所謂雑種。故にコンプレックスとなっている。

特徴…恍惚の表情で刃物を持っている時に近寄ると魔王以外を切り裂く。ゴミ箱に捨てられていた所を魔王になんとかで拾われたらしい。なんともなくでも拾って貰った為に敬愛（拾った本人はどうでも良さげだ）。

魔法使いロコ・イブン・イブナ

ロコ…スペイン語で狂気

イブン…アラビア語で息子

イブナ…アラビア語で娘

“狂気の双子”

種族…人間だったがキマイラに。双子が一人っ子になった（あれ、このフリーズどこかで…）

特徴…間延びした喋りは実は双子が交代しながら言っている為。性別は謎。ふたなりの可能性大だがない可能性も高い。

ルイ…魔王のペット

魔王の魔力を当てたカオスの結晶体から出来たペット。

一人称は某。

スライムから人間、ドラゴンにまで変幻自在の体躯。

種族は宝石に宿る聖霊に近い。

どのキャラクターも魔王には精一杯仕えています。

言うことを聞かない奴やムカついた奴は喰われるから。単純に強いから。魔王だし…。

理由はその内のどれか一つ。

魔王様は享樂を求む

「んー…」

瘦せぎすな男達が、魔王の前で縛られて震える。

誰もが抵抗する事を忘れて——達磨状になった少女を見詰めていた。

官能的な少女の裸体は酷く血塗れていて、それはつい先程切り落とされたという事を証明するかのように湯気が立っていた。

見られた事と切られたショックで漏らした少女の瞳には、もう光が宿っていない。

それをぐるりと見渡した少年の姿をした魔王は、呆れたように呟いた。

「トルテウラ拷問官ー…ぼく、つまないだけどお？いつ出荷するのぉ？いつなのぉ？コレを食べる奴なんて気が狂ってると思えないけど…」

トルテウラと呼ばれた女性は、端正な天使の人と似た体とドラゴンの体を無理やり繋ぎ合わせたようなフォームをしている。

右は人の形、左はドラゴンといった感じのぐちゃぐちゃ具合だ。

トルテウラは魔王に名を呼ばれたと感極まって、近くにいた男を持つていた鎌で処理した。

「ワタシの肉牧場はお気に召して頂けませんでしたが…では魔王様！！直ぐに用意致しますわ！！魔王様もアレを見て頂ければ機嫌宜しくなる筈ですもの！！」

「ふーん…期待してるよお？」

飴をガリつと噛み砕くと、魔王はトルテウラにそう返した。後ろに居た筈の男は、いつの間にか噛み砕かれた飴のような形状へと変貌している。

それをちらりと見た魔王は上機嫌に「ロコ、あれを詰めておいてよ」と天井に向けて投げかける。

すると――天井からするすると水玉のようなものが染み出て、それがぽふんとピエロの格好をした子供：ロコの姿に変わった。

「トルテウラの肉工房はー肉臭くて嫌なーのねー：トルテウラ、糞尿くっさい…」

ロコは可愛らしくツンと尖った鼻を摘まんて手をぶんぶんと振ると、青筋を立てるトルテウラを挑発する為に魔王に近寄り抱き締めた。しかし、トルテウラも負けていない。

「あらあらロコちゃん。ちっさい子には刺激が強すぎたみたいですな？ほーうら、飴をあげるから魔王様の御命令をこなしなさい。」

「ロコたんは子供じゃないのよー！！」

ロコに引つ付かれながらも無関心に眺めていた魔王は、飴を取り出して噛み砕いた。

すると、ロコの頭が粉々になる。

「もー…ぼくの言う事を聞くのが一番でしょ？」

魔王はロコの腹を蹴り上げて、トルテウラを見る。
子供みたいな台詞とは裏腹に、底冷えのするような闇の潜む目をしていた。

それを見たトルテウラは、魔王が差し出した足を跪いて汚れるのも構わずに膝に乗せ、綺麗なシルクのハンカチでロコの血を丁寧に拭いた。

魔王の服は魔力で出来た衣である為に、この拭う行為に意味はない。ただ、魔王に構われる事に幸福感を募らすトルテウラを、一挙一動を、今は楽しんでいるというだけである。

「頭はー再生し辛い、なーのねー」

ぶしゃっと血溜まりが一瞬で再生し、ロコは傷一つない姿へと変わった。

そして頭をまた潰されてはなるまいと直ぐに片付けを始め、直ぐに終わって消えた。

それを魔王がぱちくりと瞬きをして見つめ、口角を上げた。

「再生するとは知ってたけど、頭部も再生するんだねえ。ぼく、びつくりしたよ。」

白々と告げる魔王に「、魔王様…残念ですよ…本当に」と心底残念だとトルテウラが呟いた。

「けど、雑に使っても壊れないって事だよね？使い潰す予定があるからさ、まだ保つて事が分かって安心したよー」

嬉しそうに言う魔王に、魔法使いとペットはぶるりと震えた。

「魔王様：お気に召されましたか？」

「成る程ねえ…君つてば僕の性格を本当によく理解してる。誉めてあげるよ。」

「…！！有り難き…幸せで御座いますっ！！」

魔王は物語を綴った本の頁を捲りながら、トルテウラを適当に誉めた。
適当だろうとなんだだろうと魔王からの労いの言葉に、トルテウラは天にも昇る思いで喜んだ。

トルテウラの渡してきた物——子供向けの英雄譚。分厚い1巻で1章、全部で4巻まである。——を長い爪でなぞり、頁を捲る。
笑みが自然と零れ落ちた。

「“女神様は魔王を倒して貰う為に剣を授け、お姫様は勇者様を召還しました。”…ふふ。人間つてさあ、とっても変だねえ？どうして総出で倒さないのかなあ？まあ、国の守りが薄い内に襲おうとする、浅ましい人間の考えがあるからなんだろうけど。そうして躊躇していくうちに殺されて全部ぜえーんぶ終わり！…なんて事は考えないんだね！勇者を召還だよ！？勇者を！！他の世界の人間を勾引かして責任を押し付けているんだよ！？弱さ故に疑心暗鬼な分際で万が一を考えない！！
笑っちゃうね！！」

何が可笑しいのか笑う魔王を、うつとりと見つめるトルテウラ。

魔王は目を細めて呟いた。

「ねえ——拷問官。君ならさあ、何が一番絶望を膨らませる事が出来ると思う？」

くつくつと笑いながら囁かれたその台詞に、トルテウラは拷問官としての意見を献上した。

「雄雌関係なく兵士の性欲処理として扱いそして妊娠させ下級種族を増やさせるという方法や、人間のガキを独房に放り込み飢え死に寸前のガキの前で親を切り刻んで作ったスープを与える、といった事ならば既にしています…」

魔王はばさりとマントをはためかせ、辺りを見渡した。

綺麗に濁った赤色の大空に、灰色の地面。

紫の草には毒々しい花が咲き乱れ、人間にはとても住めない環境――

――魔界。

魔界ではトルテウラの言ったような拷問から手軽なものまで、まるで人間を肉食動物が狩の道具として兎を生かさず殺さずに遊ぶかの様に、その絶望の表情と囁かな抵抗を楽しむのだ。
勿論、トルテウラの言う様に性欲処理用や繁殖用に飼う魔族も少ない。

けれど――

「それはとても不味い。不味くて不味くて飽きてしまったんだよトルテウラ。舌が肥えてしまっているんだよトルテウラ。君だって…あの鶏は嫌いなんでしょ？」

風が吹き荒れて、呟く魔王のマントが緩くはためく。

その度にマントの中に見える無数の呪怨に下級種族は青ざめた。
トルテウラは魔王の言わんとする言葉を理解し、うつそりと微笑み
頷いた。

「そうですね…ぎっしりと詰め込まれて育った鶏の肉は、本当に不
味いです。」

そしてふと、トルテウラは目を輝かせた。

「まさか…人間の王に成り代わり、魔王に仕立てた人間の王を勇者
に討たせるとかですか？」

誉めて誉めると言わんばかりに目を輝かせたトルテウラを、魔王は
面白げに見詰めて嗤った。

「惜しいねえ。住民は人間で王族も人間…成り代わるのはね、勇者
役にしようと決めた人間に深く関わるもの全部。ぜえーんぶ、だよ
？一つたりとも本物はないんだ。

…きつとねえ…最初から最後まで弄ばれていたと気付けば、とって
も絶望するよお…」

愉しくて愉しくて愉しくて愉しくて愉しくて仕様がな程に愉快で
仕方ないと、懷から取り出した杖を一振りした。

するとトルテウラの肉牧場の子供の1人がぼとりと召還され、暗い
瞳でそのまま地に這い蹲った。

その子供は金髪碧眼の美少年…正に、王子や勇者に相応しい色合い
の者だった。

「それはそれは…素敵な計画ですね…」

いつの間にか現れたムミアは、くつくつと笑って子供をつついた。子供は薄暗い瞳でちらりと見るだけで、何の感情も持っていない赤子同然の存在なんだという事を匂わせていた。

「それで、これの親は何処にあるのかな？」

魔王はムミアがずっと差し出した杖を持ち、それからトルテウラに話しかけた。

親が居るなら居るで、その方が楽だと……いや、愉しそうだからと考
えたからだ。

尋ねられたトルテウラは暫く考えた後、ああと手を叩く。

「其れならば魔王様……その腹の中です。」

「子宮を使っていたものや種を搾り取ったものは、大抵が良質ではない肉ですしねえ。」

ムミアも知っていたからか、適当な相槌を打つ。

それによりその子供が此処で産まれたものと分かり、魔王はふうんとどうでもよさそうに呟きながらも獐猛に笑った。

嘲るように、見下すように、
 嘔るように、塵を見るように。

杖をぐるんと回したかと思えば、ぐちゃり。

そんな湿っぽい音を立てて、子供の頭皮を裂き頭蓋骨を砕き脳味噌を抉り記憶を潰し塗り替えた。

そしてまた、ぬかるんだ音を立てて杖を抜いた。

途端、子供は再生する。

気持ちの悪いくらいスピードで、頭が再生する。

「勇者。これは勇者。決定決定だあいけつてーい！勇者の誕生です
おめでとうございますハッピーバースターあはははははは！！

「!!」

勇者と名付けられた子供は

人間の親役のムミアの部下共に連れられて

「女神にあつた」

という偽の記憶だけを植えられて

魔王の部下が集まっている“人間の集落”へ向かった

女神役はロコに

恋人役はトルテウラに

騎士役はムミアに

剣士役はルイに

そして、王様役は魔王が

魔王のフリをしたアレこそが勇者の父と母の魂の成れの果てだという事は、魔王しか知らない。

勇者は知らない。

母と父が親戚が友達が先生が老人が老婆が子供が赤ん坊が初恋が戦友が学友が恋人が、自分の父と母を殺してバラして喰らった魔族とは知らない。

感情までもが操られたものだとは知らない。

知らせない悟らせない。

魔王レイル・フルカは、弄った時にもう一つ勇者に付け足した。

「んー…楽しみ。とても楽しみ。今までの勇者とやらはとっても単

調だったからねえ。」

魔王様は享楽を求む（後書き）

犬畜生にも劣る倫理観、とでも言うべきですかね。

まあ、人間じゃないんで道德観が違ふんだろうという事で。

ポロリはポロリでも内臓ポロリな描写ばかりを書いたからか、ちょっと違うポロリも書きたくゲフンゲフン

魔王様の御誕生

歴代の中でも残酷非道と名高い魔王レイル・フルカ。

しかし、レイル・フルカの両親までもが特殊だった訳ではない。

魔王というのは、人間の王族の様に子孫が継承していく訳ではない。倒した者が魔王を名乗るのだ。

レイル・フルカの産まれた里は、小さな田舎町だった。

魔族でも人と手を取り暮らす、少数の者達が集まる田舎町だった。

弱者を蹴散らす魔界のやり方に嫌気が差し、人界と魔界の門の近くへと避難した弱者達の末裔だった。

優しく優しく腹を撫でるレイル・フルカの母と、穏やかに笑むレイル・フルカの父。

出来たと分かった当初はまだ、和やかにいられた。

だが、日に日に腹の子の魔力は強くなっていき、産まれる直前には禍々しい程の強大な魔力が渦巻いている事に気付いた。

それもまるで隠していたかのように産まれる直前に魔力は上がった。強力な魔力といっても弱い種族にしては強いというだけであって、魔族全体から見ると弱いくらいだった。

だから誰も気付けなかった。

本当に産まれる直前に、禍々しく強大な、当時の魔王よりも強大な、魔力を持った異常な子に。

産まれる直前。

異常に跳ね上がった禍々しい魔力で母の臍物を握り潰して、母の腹を盛大にかつ捌いて出て来たレイル・フルカ。

「御誕生おめでとうぼく。」

母の臓物に塗れてにこやかに笑うレイル・フル力は既に今の姿だった。

父はそんな息子と妻を見て、発狂した。

息子は妻の幼い頃に似た愛らしい顔立ちで、声で、産まれたばかりというのに喋って、更には妻を殺してにこやかに笑う。

父は何も考えられなかった。

ただ、本能から叫んでいた。

「この人殺し！！！！」

その言葉に心底嬉しそうに笑って、レイル・フル力は言った。

「壊して何が悪いの？」

「これは殺さなくてはいけない！！此奴は私の息子等ではない！！破壊神だ、此奴は破壊神の生まれ変わりに違いない！！！！」

父がそう叫び斧を振ると、レイル・フル力は笑って斧を弾いた。

その弾いた斧は——父の妹の脳天を裂いた。

「あつ…そんな…あ…ああつ…」

呆気なく死んだ妻と妹を見て、静かに崩れ落ちる父。

レイル・フル力はそれを笑うだけ。

「ああ…なんて、なんて、なんて気持ち良いんだろうね！！呆気な

くざつくり刺さつて壊れちゃうなんて！！おにーちゃんの斧で死んじゃった♪大事なんだあーいじな妹ちゃんが♪あはははは！！良かったね！！これで君には何も無い、なくなったという訳だよ！！」

母の死骸を蹴り、妹の死骸を踏み、レイル・フルカは固まる村人を蔑むような目で見た。

泣いている父を愉しげに見下した目で見た。

手を翼のように広げて産まれたばかりのレイル・フルカは、夢見る子供のように瞳を輝かして宣言した。

「ぼくはレイル・フルカ。魔王として産まれた、生まれながらの魔王だよ！」

思い出したかのように武器を向けた村人に、父に、無邪気な笑みを浮かべた。

「飽きたから半分死ね」

ぐしやりと、その言葉を聞いた途端に呆気なく潰れた。だがまだ生きているようで、か細い悲鳴が漏れ木霊した。

いきなり強大な魔力を感じた魔王と魔王軍は、父や母に親族の死体がある中、ペースト状になる程に飛び跳ね踏み潰し殺し無意味に無邪気に笑っているレイル・フルカを見つけ、戦慄が走った。

まるで王のように傲慢で不遜で、何よりも強大な魔力の持ち主。

魔王ですら一目見て、一瞥をしただけで屈した。

次期魔王……いや、そもそも今までの魔王はこの存在が産まれるまで

の代理に過ぎなかったのだと思う程に。

「君はさ…どんどん石になっていくのと、死ぬ程の激痛を持った不死——どっちが好き？」

唐突にレイル・フルカはそう魔王へと聞いてきた。

魔王は犬歯を唇に食い込ませ、なんともいえない威圧感の中で漸く返した。

「の、望む方につ…」

「あそう。なら…趣向を変え陵辱をしてあげよう。M字に脚を固定して手を後ろに縛り付け君の嫌う下等種族の慰み者へしてあげよう。だあいじょおぶ…死なないようにしてあげるから。」

逞しい男共に、せいぜい可愛がられなよ。

レイル・フルカは目を細めていった。

例え仮だとしても魔王として君臨した、プライドの高い男へ。

そして可哀想な事に…魔王は強者であった為に、わかってしまっていた。

レイル・フルカの異常な魔力に、圧倒的な強さに。

戦慄くそれにもう興味は失せたのか、レイル・フルカの視線が逸れた。

ほっとしたのも束の間だった。

魔力を没収され人界へ転送されたのだ。

——魔王だった彼がどうなったかは、陰間の中でも一番の人気者だったと言えれば分かる人には分かるだろう。

そして震える魔王軍を引き連れて、レイル・フルカは魔王城へと魔王として帰還した。

子供を見て震える者は多数。

少数の陰口を叩こうとした者は、空間に捻り潰されて死んだ。

口答えすら、質問ですら、彼は許さなかった。

大きな玉座に座り、レイル・フルカ——魔王はにっこりと笑って言う。

「死ね。」

「使えなさそうだから、お前とお前とそこら辺の奴は死ね。」

「解雇？なにそれ？要らないのは魚の餌になれば早いでしょ？」

「ああ、お前は使えそうだから残してあげる。」

いつしか魔王レイル・フルカの暴力的な秩序が普通となり、弱者は末端までいたぶられ魔界へ存在出来なくなった。

魔王様の御誕生（後書き）

ペースト状でもまだ生きているとか考えたら…嫌ですねえ…

陰間はオブラートに超包んだ結果の言葉です。

分からない人は分からないままでいて下さい。

レイル君は身内だろうが基本、自分が楽しけりや躊躇いのない子。

超鬼畜。

まあ、わりと善人寄りくさい花雪さんがもしこの魔界に居たら鬼畜からただの愉快犯な少年に矯正させられたかもしれません。

ていうかこの連載、他よりグロい…グロすぎる…！！

と思いましたが、よく考えたら暗黒黙示録とどこいどこいでしたという。

まあ、これとそれの2つ以外は健全ですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3488x/>

魔王様の食卓

2011年11月17日20時29分発行